

偽物の木で何が悪いのか？ 震災モニュメントの可能性について

椎 原 伸 博

What's Wrong with an Artificial Tree? Potentiality of an Earthquake Monument

Nobuhiro SHIIHARA

要 旨

東日本大震災の被災地では、震災の遺構をモニュメントとして残すべきか否かという問題が各地で生じた。気仙沼市の座礁船や南三陸町の防災庁舎は、視覚性の強いシンボリック的存在であったが、被災者への配慮から取り壊しが決定した。そのなかで陸前高田市に復元された「奇跡の一本松」は高度な復元技術により「真正さ」を有している。それは、純粋な視覚により「奇跡の一本松」を無関心的に見つめることによって成立し、触覚や嗅覚、味覚といったより身体的な感覚は忘却されている。しかし、ゆるキャラやロゴマークを活用する「奇跡の一本松」を活用する地域振興は、そういった純粋な視覚性に、ノイズのように様々な物語性や目的を付与する。それは、震災復興という「大きな物語」を導くが、そこから「震災の記憶」そのものがこぼれ落ちる可能性について考察する必要がある。そこに、新たな震災モニュメントの可能性があり、それは震災について考える倫理でもある。

キーワード：震災復興 震災遺構 視覚性 モニュメント 環境美学 防災教育

Abstract

Issues of whether or not to leave earthquake ruins as monuments have become controversial in various areas hit by the Great East Japan Earthquake. The stranded ship in Kesenuma and the Disaster Prevention Office building in Minami Sanriku are the symbols of the affected areas and highly appeal to eyes, but demolition of both structures has been decided out of consideration for disaster victims. In turn, the replica of the “Miracle Lone Pine Tree” was built by advanced reconstruction technology and shows authenticity. The authenticity is true as long as the “Miracle

Lone Pine Tree” is sensed only with visual sense and without emotion, and then the body senses such as senses of touch, smell and taste are not used for appreciation of the monument. However, the regional improvement efforts using the logos and Yuru-chara, or heartwarming mascot-like characters of the “Miracle Lone Pine Tree” as promotion tool add the noisy stories and purposes to pure visual sensation. Those efforts may contribute to make a big story of earthquake disaster reconstruction, but weaken memories of earthquake disasters. New earthquake disaster monuments have potential and may give you an opportunity to consider in an ethical manner what the earthquake disaster is.

Keywords: earthquake disaster reconstruction, disaster ruins, visibility, monument, environmental aesthetics, disaster prevention education

I. 被災地の美しい光景というパラドックス

本論説は、平成23年度に行った実践女子大学教育研究振興基金による研究プロジェクト「大震災以降の新しい感性論の構築に関する研究」、及びその研究プロジェクトと東京芸術大学美学芸術論研究会との共同主催の形で、平成24年1月に開催した「3.11をめぐる芸術的営為と感性」というシンポジウムにおける研究成果に依拠している。それらは、研究プロジェクト報告書と東京芸術大学美学芸術論研究会誌『カリスタ』に成果報告がなされている。本論説はその後の状況について考察するが、最初にこれらの研究の経緯について以下概略を示すことにする。

平成23年3月11日以降に、本研究と連関して三つのシンポジウムが開かれた。それは『美学vs.現代アート』（平成23年4月23日 美学会：北仲スクール）、『クシシュトフ・ヴォディチコ：アートと戦争』（同年8月8～10日 北仲スクール）、『アイステーシス——感性論としての美学をめぐる』（同年10月17日 美学会全国大会、東北大学）であり、それらは、テーマがそれぞれ異なるにせよ、その問題意識が交錯しつつ、3.11の現実を目の当たりにした上で、感性のあり方や芸術の使命あるいは可能性を考察するという問題意識を共有していた。

一方、芸術表現の動向に目を向けると、アーティストが被災現場に直接関わり、被災者と深く関わる多くのアートプロジェクトの実践があった。また、東京都は公益財団法人東京都歴史文化財団と共催して、「Art Support Tohoku-Tokyo（東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業）」として、岩手、宮城、福島の前3県で19のプロジェクト、60のプログラムを展開した。このようなアートの活動は、千代田区の文化芸術重点プロジェクトとして設立された「アーツ千代田3311」において、平成24年3月11～25日の期間で開かれた『「つくることが生きること」東日本大震災復興支援プロジェクト展』や、大震災の被災地でありながら、全国的な注目度が低い

状況にある茨城県水戸市の「水戸芸術館」において、同年10月13日～12月9日の期間で開かれた『3.11とアーティスト：進行形の記録』展などで、詳細な報告がなされた。

さて、先述した三つのシンポジウムに話をもどすと『美学vs.現代アート』では、パネラーの吉岡洋は「exposure」（露出している、曝されていること）という概念を用いて、1755年のリスボン大震災により、文明と自然が剥き出しの状態で交差することによって、カントやヴォルテールをはじめとする近代哲学の大転換が始まったことを論じた。そして、このシンポジウムを受けて室井尚は、同年6月の美学会東部会例会において、この概念を「人間の尺度や認識能力を遥かに超えたもの（自然や原爆のような人間的尺度をはるかに超えた事象）が立ち顕れることであり、それを前にして人間がただ言葉を失って立ち尽くすしかないような経験に関わる概念」とした上で、そのような純粋な「受苦（passion）」の状態と、文化やアートの問題はどのように関わっていくべきなのかという問題提起をした。

そしてこの問題提起に対して室井は、ポーランドのアーティスト＝クシシュトフ・ヴォディチコを招聘し、同年8月に『アートと戦争』というテーマでシンポジウムを開催した。このシンポジウムは、「戦争」をテーマにしていながらも、3.11以降の日本の状況に深く言及せざるを得ないものであった。このシンポジウムを総括することは困難であるが、そこで問題になった「パレーシア」という概念に注目する。それは、晩年のミッシェル・フーコーが論じたものであり「包み隠さず自由に話すこと」であり、「言論の自由」や「危険を冒してまでも公益のために真理を話す義務」を意味している。それは、ヴォディチコの作品の根幹となっているものであり、このシンポジウムに合わせて製作された作品、つまり、実際に被災地に赴き、被災者の生の声を採取しながら作成された、パブリックプロジェクション《Survival Projection2011》にも通底している。

この作品は、もともとは軍を退役した兵士たちが語る生々しい声を再生しながら、その言葉を銃火器の音と共に、建造物の壁に撃ち込むプロジェクション作品「退役軍人のためのヴィークル」を元にしたものであり、退役軍人たちの声の後に、津波の被災者たちの声が流れるというものであった。この作品は、同年に開催されていた横浜トリエンナーレの連携プログラムとして、横浜の新港ピアで公開されたあと、被災地である仙台市の「せんだいメディアテーク」1F オープンスクエアでも公開された（図1）。特に仙台における公開に際しては、相当な配慮の元で行われたと推測するが、一方横浜の観客との温度差の違いも当然あると思われた。それは、この作品自体に対する批判となりうるだろう。しかし、この作品の本質的な部分は、いかにその現場にある声を「聞き取る」という能力にあり、それは、吉岡が提示した「exposure」を真摯に受け取る能力と言い換えることが出来よう。

次に『アイステーシス——感性論としての美学をめぐる』を問題にする¹⁾。このシンポジウムでは、小林信之がファシリテーターとなり、津上英輔、小田部胤久、岡田温司の三名のパネラーが発表した。そのうち、津上英輔の「Sensus communis 再考：共感に立つ美学に向けて」を問題にする。そこで、津上が実際に被災地を訪問した経験に基づきながら「共感に立ちながらなお



図1 クシシュトフ・ヴォディチコ《Survival Projection2011》
2011年8月11日、せんだいメディアテーク 筆者撮影

自由である感性、それを模索することが、今後の美学の課題」であるとした。その際、被災した関上の住宅の廃墟に「あじわい」を感じるとし、それを「すがすがしい」と発言したことが問題となった。この津上の発表に対する質疑応答において、被災地の石巻専修大学教員である松崎俊之は、3月11日の本震よりも、4月7日の余震の経験の絶望感を問題にした。

ところで、津上は『あじわいの構造 感性化時代の美学』（春秋社2011年）において、「対象を感性的に捉えるという場合、それがすぐれて感性を働かせることを意味するとしよう。したがってある対象が感性的であるとは、それが感性によってこそ最もよくとらえられること、言い換えれば、その対象をよりよくとらえるには、感性をもっと働かせる以外にないということ、さらに言えば、感性を働かせれば働かせるほどそれをよりよくとらえることを意味する。」²⁾として、そのような感性的な性質を「あじわい」としている。ここで問題にしたいのは、松崎が語った「絶望」の感覚であり、大きな災害に直面し希望すらなくなった時に生ずる「無」の前に松崎は「exposure晒された」という事実だろう。そして、それは「あじわい」という言葉では解消できないだろう。

以上三つのシンポジウムを受けて、平成24年1月に筆者は『3.11をめぐる芸術的営為と感性』というシンポジウムを、先述の松崎俊之と、宮城教育大学教員でアーティストの村上タカシをゲストスピーカーとして迎え開催した。そこで、村上タカシは、自らの活動「復興支援プロジェクト 3.11メモリアルプロジェクト」および「のこすプロジェクト」について説明し、地震の記録として後世に伝える「もの」が必要であり、写真、映像、証言、科学的データだけでは届かない、その場で感じられる・感じられたモノを残すことの重要性を訴えた。

そして具体的には、気仙沼の鹿折唐桑の座礁船「第18共徳丸」（図2）を保存すべきとしたが、



図2 気仙沼市鹿折唐桑に座礁した「第18共徳丸」2012年1月 筆者撮影

その際、廃墟の町に座礁した船というシュール・レアリスム的な光景を「美しい」とし、それはまるで「パブリック・アート」のようであると発言した。この発言は、当然津上の「さすがにいい」を想起させ、震災の光景に対する感性的認識と倫理の関連が問題となった。この問題に対して、松崎俊之は西村清和の「美的フレーム」説を援用しつつ³⁾、今回のような悲惨な光景を「美的フレーム」に適合させること自体が誤りであるとした。

ここで注目したいのは、村上が地元住民との交流のなかで、この座礁船を「ヤマト（宇宙戦艦ヤマト）」と呼び、愛着をもっていたという報告を行った事である。この座礁船とヤマトを比較してみると、確かに船体上部は青とグレイの色の違いがあるながらも、船体下部は同じ赤が塗られ、色彩的な類似性を感じさせる。ただし注意したいのは、このような意識の背景には、その風景を美しいと感性的に認識するよりも、マスイメージとの類比性が優先されていることである。ここでは、シュール・レアリスム的風景という意識よりも、漫画やアニメのイメージとの親近性が問題となり、この光景をスペクタクル化する傾向がある。

気仙沼市はこの座礁船を震災遺構としての保存を検討したが、この座礁船は多くの生命と財産を奪ったものであり、この光景を見ることを辛く思う住民が多かった。また、世論も保存と撤去の間で揺れ動くなか、結局平成25年9月船主は撤去を望む住民の声を尊重し解体した⁴⁾。このような、震災遺構の保存の問題は、南三陸町「南三陸町防災対策庁舎」や宮古市の「たろう観光ホテル」などに共通の問題であるが、筆者はこれらの事例を阪神淡路大震災の震災遺構と比較し、村上が「美しい」とするようなインパクトのある光景が、東日本大震災の方が多くあることを問題にした。

実際、鹿折唐桑の座礁船の表象はインパクトがあり、それは多くのメディアで取り上げられ、この光景を見てみたいという欲求にかられるようなものであった。そして、座礁船の前には連日



図3 陸前高田市「奇跡の一本松」2013年7月 筆者撮影

多くの観光客がやってきて記念撮影をしていくことになる。それは、被災地巡礼という観光資源としての潜在力を有していたといえるが、この船が解体された現状において大震災の記憶を保存する観光資源として注目されているのが、陸前高田市に復元された「奇跡の一本松」（図3）である。

Ⅱ. 震災モニュメントと防災教育

気仙沼市は平成23年10月7日に震災復興計画を策定したが、そこで七つの柱を提示している⁵⁾。そのうち、座礁船の保存活用を政策に盛り込むとするならば、二番目の柱「防災体制の整備」がそれにもっともそれに合致していた。というのも、そのなかの重点事業として「鎮魂の森 震災復興 防災記念公園」の整備があげられているからであり「復興のシンボル」として、この船を活用するという目論見があっただろう。

もともと、この施策は内閣官房に設置された「東日本大震災復興構想会議」による「復興への提言 悲惨の中の希望」の七原則の第一原則つまり、「失われたおびたしい『いのち』への追悼と鎮魂こそ、私たち生き残った者にとって復興の起点である。この観点から、鎮魂の森やモニュメントを含め、大震災の記録を永遠に残し、広く学術関係者により科学的に分析し、その教訓を次世代に伝承し、国内外に発信する。」に依拠するものであった⁶⁾。

この流れは「震災モニュメント」を、「防災教育」として位置づけ、その審美性を払拭することにつながる一方で、被災地の美しい光景というパラドックスを解消し、その保全を促進する根拠となりえただろう。そして、それは阪神淡路大震災の震災遺構の保存における原理でもあった。例えば、阪神淡路大震災において、インパクトの強かった被災地の表象として、阪神高速道路の

倒壊をあげることが出来よう。高速道路が支柱ごと崩れ落ち、また大型バスが路面から転落寸前の映像は、強烈な印象を多くの人々に与えた。しかし、それら都市のインフラは早急に復興され、現在その記憶をたどるのは困難な状況にある。現在、阪神高速の倒壊の記憶を保存するモニュメントは、神戸市に二箇所設けられている。

一つは、神戸市中央区新港町の国道二号線歩道横に、建設省近畿地方建設局（当時）が設置したもの（図4）であり、もう一つは神戸市建設局が須磨区若宮町の海浜公園の東端に設置したもの（図5）であり、それぞれ阪神高速道路の橋脚の一部が保存されている。新港町の事例をみる



図4 阪神淡路大震災により被害を受けた阪神高速道路の橋脚の遺構 神戸市中央区新港町 2011年12月 筆者撮影



図5 阪神淡路大震災により被害を受けた阪神高速道路の橋脚の遺構 神戸市須磨区若宮町 2011年12月 筆者撮影

と、都心部とはいえ交通量の多い幹線道路と高速道路の間の寒々しい場所に設置され、そのキャプションは植栽によって隠れてしまいそうであり、よほどの注意を払わなければ、このモニュメントを確認することは困難な状況にある。同様に、須磨区若宮町の事例も、わかりづらい場所にあると共に、キャプションは汚れたままであり、記憶の風化を意識させることになる。

ここで注意深くみたいのは、そのキャプションにおいて、防災教育の視点が強調されていることにある。前者のキャプションには従来の耐震技術の不備を認め、それを乗り越える復旧を目指したことが強調され「私たちは今後も、この震災から得た教訓を風化させず、引き続き『安全で災害に強い道づくり』をすすめてまいります。こうしたことから『被災の姿』を後生に残すことを望む声や、防災意識の高揚に資するため、ここに被災した浜手バイパスの『R C 橋梁、伸縮装置、支承』を保存することにしました。」と記されている。

一方、後者の事例では「震災復興を進める中で、この震災から得た教訓を明日のまちづくりに生かすと共に、この厳しい経験を後生に伝えるため、今回の地震で被災した橋梁構造物の中から損傷部分をメモリアルとして保存展示することにしました。」としている。そこには、当然ながら審美的な側面はなく、倒壊した高速道路というインパクトのある表象に比して、控えめな保存がなされたといえよう。

そもそも、阪神淡路大震災における震災遺構においては、被災地の美しい光景というパロドックスを生み出すことは殆どなかったように思われるが、その中で神戸市長田区にあった通称「神戸の壁」(図6)は、その保存活動において審美性が問題となった事例として注目できる。この壁はJ R新長田駅から徒歩で5分ほどの長田区若松三丁目に建っていたものであり、1927年にたてられた若松市場の延焼防火壁の一部であった。この壁は戦災にも耐え残り、震災では周囲の建物が倒壊全焼するなかで、この壁だけが倒れることなく残った。結局この壁は、再開発事業に

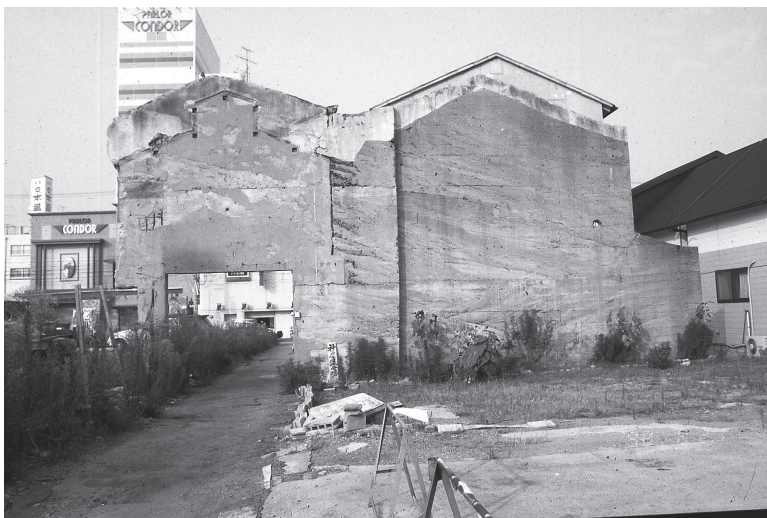


図6 「神戸の壁」神戸市長田区若宮町 1998年8月 筆者撮影



図7 北淡路市の北淡震災記念公園内の野島断層保存館に移築された「神戸の壁」2012年1月 筆者撮影

伴い、現地での保存は断念せざるを得ない状況となり、2000年に淡路島の津名町（当時）の「しづかホール」の横に移転保存された。その後、震災の活断層である野島断層を保存する北淡震災記念公園が整備されることになり、2009年に野島断層と、その真上に建てられていた住宅が保存されている「野島断層保存館」の博物館資料として移築されることになった（図7）。

ところで「神戸の壁」の保存に深く関わったのは、震災の光景を描いていた画家の三原泰治を中心とする「リメンバー神戸」のメンバーたちであったが、この「神戸の壁」の事例で注目したいのは、代表者三原泰治氏の以下のような発言である。三原は、2005年に開かれた「震災を描いた作家たち展—あの頃（ころ）、その時、そして10年」という展覧会を前にして、主催する神戸新聞社の記者に対して次ぎのような発言をしている。

「震災の真実・体験と教訓を伝える」ことこそ、私の使命と思った。世界の人々に伝承するために、形ある生き証人「神戸の壁」の保存を推進、人々の共感を得て実現した。この行動は現代に生きた証（あかし）であり、私の目指すパブリック・アートである。

（神戸新聞 2004年12月10日）

ここで注目したいのは、三原自身がこの活動を通じて「パブリック・アート」という意識をもっていたことである。阪神淡路大震災に関しては、造形作家今井紀雄が行った『創造にむけてのガレキ展』や、兵庫県立近代美術館の『震災と美術 1・17から生まれたもの』、芦屋市立美術博物館の『震災と表現展』といった展覧会、さらには南芦屋浜の震災復興住宅におけるアートワークなどを考える必要があるが、新しく作品をつくるのではなく、震災に耐え残ったものに積極的に

関与していく背景には、ただの震災遺産という意識だけでなく、ある種の美意識が存在していたといえよう。それを三原自身、「悲惨を超えた崇高な美」と表現しているのだが、この美意識あるいは感性の問題は、東日本大震災の被災地の光景とモニュメントの問題と同一のものである。

しかし現在、神戸市長田から淡路島に移築された「神戸の壁」は、本来の地域コミュニティから隔離し、ひたすら防災教育の資料として機能している。現在「神戸の壁」が設置されている淡路市の門康彦市長は、最初壁の移築がなされた旧津南町民の間には「神戸の壁」に対する違和感について議論があったことを前提にしつつ、旧津南町から現在地への移築について次のように説明している。

人工の神戸の壁を、天然記念物の断層の見学通路の一角に設置し、生きた教材として、防災教育の拠点として、記録と記憶に留め、これからも、阪神淡路大震災の悲しみを風化させることなく、後世に語り継ぎ、この淡路市から警笛を鳴らし続けるモニュメントとして再生することが、生き残った者の責務として、ここに提案をいたします。⁷⁾

ここで、廃墟の中に力強く佇んでいた「神戸の壁」の記憶（それは多くの人に勇気を与え、そこに審美性をも付与したものであった）は、博物館の資料として矮小化され、本来「神戸の壁」が建っていた地には平成21年には高さ18mにも及ぶ巨大な「鉄人28号」のモニュメントが設置されることになる。このモニュメント像を製作したのは長田区の商店主らによる特定非営利活動法人「KOBE鉄人PROJECT」（正岡健二理事長）であり、「鉄人28号」の原作者の横山光輝が神戸市須磨区出身であることから、それにちなみ阪神淡路大震災後の復興・商店街活性化のシンボルとして製作された。総工費は1億3500万円であり、神戸市からの補助金4,500万円のほかは、個人や企業からの寄付・協賛金でまかなわれた。

この像はただの復興のシンボルというだけでなく、水木しげるの作品をもとにする鳥取県境港市や、石ノ森章太郎の作品をもとにする宮城県石巻市のような、マンガを用いるまちづくりの系譜にある。そこには経済的、観光的思惑が十分に読み取れ、そこに「防災教育」といった視点を読み取ることが困難である。実際、このプロジェクトの最終目的は「横山先生の作品の素晴らしさをより永続的にアピールする、神戸の新たな文化・観光資源「横山光輝記念館」をオープンする事です。」⁸⁾とされ、震災の記憶を見いだすことは困難である。

ここで、鹿折唐桑の座礁船の話に戻ると、この地域は神戸の長田地区同様に、あまりにも被害が甚大で、都市計画が確定するまで永続的なモニュメントを建立することが困難な状況にあったといえよう。そして、すべてが無の状態から復興するためには、何らかの「物語」を構築する傾向が強まるだろう。そのとき「防災教育」あるいは「震災の記憶の保存」という目的は、村上が見いだしたような「美しさ」を兼ね備えたパブリック・アートのようなものか、あるいは極めて象徴性の強いモニュメントによって補強され、そのものの目的を凌駕して極めて視覚性の強いも

のとなったかもしれない。しかし、実際には船は解体され、ヤマトのようなマスイメージの再生産の危険性も回避されることになった。しかし、この船がその場であって、生々しく記憶を痕跡づけていた状況も失われることになった。

生々しい記憶は、本来視覚性に依拠するよりも、人間に備わる触覚や嗅覚、味覚といった低級な感覚によって、痕跡づけられるものだろう。筆者は「神戸の壁」がまだ長田で屹立していた光景を記憶



図8 鹿折唐桑の座礁船の下敷きになって押しつぶされた車と火災の痕跡 2012年1月 筆者撮影

しているが、壁面には煤の跡があり大火の記憶を呼び覚ますような状況にあった。一方、鹿折唐桑の座礁船をよく見てみると、周りの瓦礫が撤去された後でも、この船の下には依然として押しつぶされた車があることに気づく。そして、その周りには、黒く焼け焦げたあとがあり、そこには、ヤマトのようなマスイメージには還元されない、生々しさが遺されていた（図8）。それは、この座礁船のモニュメンタルで視覚的なイメージに回収されることのないイメージであり、その物質性が強調されると共に、より身体的な触覚性を喚起させるものといえるだろう。それは見るための「博物館資料」となった「神戸の壁」が失ったものでもある。

Ⅲ. 「奇跡の一本松」のモニュメント化をめぐる

東日本大震災で甚大な被害を被った陸前高田市には、「高田松原」とよばれる景勝地があった。この松原は江戸時代の1667年に植林されて以来、七万本もの松によって構成される立派な松原となったのだが、震災による大津波によりたった一本だけを残して、全ての木は倒れてしまった。その後、この木は「奇跡の一本松」あるいは「希望の松」「ど根性松」などと呼ばれ、被災者に「生きる希望」を与えると共に、その木そのものに復興の願いを託すようになった。しかし、この木は塩水の影響を受け、平成24年5月に枯死が確認され、同年9月に伐採された。そして、市は「市民のみならず全世界の人々に復興のシンボルとして親しまれてきた一本松を、今後も後世に受け継いでいくために、陸前高田市ではモニュメントとして保存整備すること」⁹⁾を決定した。

この木のモニュメント化は、多額の資金が必要なことから、生活に直結する様々な事業を優先するべきだという批判の声も大きかったため、市は全世界に向けて基金を募り（図9）、平成25



奇跡の一本松 保存募金

7万本の松原からたった一本、津波に耐えた一本松。
私たちに希望を与えてくれた一本松は、もはや自立が出来ませんが、復興の象徴として新しい形で残していきたいのです。
みなさんの協力をお願いします。

岩手県陸前高田市市長 戸羽 太

岩手県 陸前高田市
奇跡の一本松

東日本大震災の大津波に耐えた高田松原の一本松は、震災直後から復興のシンボルとして、市民のみならず、全世界の人々から愛されてきました。

現在この一本松は、大地震による地盤沈下で海水がしみ込み塩分過多の状態となり、徐々に衰弱が進んで枯死にいたってしまいました。そこで、今後も復興の象徴として後世に受け継ぐために、現在の一本松に人工的な地盤を加え、モニタメントとして整備することとなりました。この整備にあたっては多額の資金を要しますが、被災地の課題が山積の今、一本松の保存に多額の予算を投じることはできません。そこで今回「奇跡の一本松保存基金」として、全額第一義金協力をお願いし、一本松の保存および周辺の環境整備に充てたいと考えております。

連絡先・問合せ先 陸前高田市まちづくり戦略課 〒029-2292 岩手県陸前高田市高田町字鳴石 42-5 TEL 0192-54-2111 (内 173) FAX 0192-54-3888

募金方法

1. 口座振込 (振込手数料はお客様にご負担頂きます)

岩手銀行 口座：岩手銀行 高田支店 (033) 普通 2051836
名義：奇跡の一本松保存基金 代表 陸前高田市市長 戸羽太

ゆうちょ 口座記号番号：02290-9-127013
名義：奇跡の一本松保存基金

2. 現金

現金書留で下記連絡先まで 持参 市役所まで
ご郵送ください。 ご持参ください。

※お名前、住所、氏名、電話番号を記載した文書を 基金係 役所のご協力をお願いしております。

3. クレジットカード決済

Facebookから「がんばっぺ!陸前高田」で検索し、奇跡の一本松保存基金のページにて詳細をご確認ください。
www.facebook.com/rikuzentakataCity

図9 陸前高田市 奇跡の一本松保存基金の案内

7日からは毎日停車に変更し、停車期間を同年11月30日まで延長した¹⁰⁾。このことは、「奇跡の一本松」が、観光資源として一定の経済効果を生んでいることを傍証するだろう。

観光資源としての「奇跡の一本松」をめぐる動きに注目すると、陸前高田市まちづくり戦略室は同年8月には、公認のロゴマーク二種（メインとサブ）（図10）を発表し、ピンバッチの販売のみならず、市が製作する公共用品や地元企業の特産品に表示して地域の経済振興に活用するという。既に陸前高田市では、平成23年8月に震災復興を促進させるべく「NPO法人陸前高田市支援連絡協議会 Aid TAKATA」が設立され、このNPOを中心に陸前高田市の「ゆるキャラ」の公募（夢☆キャラプロジェクト）が行われ、平成24年1月には「たかたのゆめちゃん」というマスコット・キャラクターを誕生させている（図11）。そして、平成25年1月には「奇跡の一本松」の復元作業を見据え、市は「たかたのゆめちゃん」の現住所を「希望の一本松の上」として、同市のPR活動を行う「ゆめ大使」の役職を拝命している。公認ロゴマークにせよ、ゆるキャラの活用は、市の復興戦略を意識させるものであるが、そこには震災遺構が有している負のイメージは払拭されることになる。

実際、奇跡の一本松復元の完成披露式典に、地元の保育園児と共に「たかたのゆめちゃん」も出席し、平和と将来の希望の物語を紡ぐことになる。このような「物語性」は、例えばイラスト

年7月1日時点で1億5千万円の費用を集めた。復元作業では、まず伐採された幹を輪切りにした上でくりぬき、表皮は防腐処理を施した。枝や葉の部分は保存が難しく、型を取り強化プラスチックにより復元された。最終的には、コンクリートの土台にカーボン製の心棒を建て、そこに輪切りにされた幹と枝葉を組み立てていくという作業が行われた。

当初、完成披露は平成25年3月を予定していたが、復元された枝葉の角度が違うという指摘がなされ、調整の後の同年7月3日に完成披露式典が開かれた。その後、JR東日本は、バス高速輸送システムによって運行を再開した大船渡線に、奇跡の一本松の見学を配慮し臨時で「奇跡の一本松駅」を設置した。この臨時駅は、当初夏期休業中の土曜・休日を中心に日中便のみ停車していたが、9月

偽物の木で何が悪いのか？ 震災モニュメントの可能性について



図10 陸前高田市 奇跡の一本松ロゴマーク（メインロゴ）



図11 陸前高田市のマスコットキャラクター「たかたのゆめちゃん」公式サイトより

レーターのはらあいによる絵本『きせきの一本松』のようなファンシーな絵柄でも強化されることになるだろう。筆者は復元されて間もない7月に同所を視察したが、木の前に設置された献花台の上には、広島市の児童が書いたと思われる二枚の色紙が置かれてあった（図12）。色紙の一枚は「陸前高田のみな様へ」と書かれていたが、もう一枚は「きせきの一本松さんへ」とされ「これからもおれないでください。がんばれ。」と記されてあった。ここで「奇跡の一本松」は、それを伝える様々な情報や、マスメージ、さらには前述したような絵本のようなメディアによって、人々に勇気と希望を与えるシンボルとして機能するばかりか、擬人化され「物語性」が付与されていることが確認できよう。

ところで、このような「物語性」は奇跡の一本松の表象の認知のされ方にも起因していると思われる。というのも、この木の表象は、震災からある程度の時間が経ってから、知られるようになったからである。震災当初は、その津波の破壊力を示す悲惨な状況や、そして被災者の悲しさが伝えられ、その後はトモダチ作戦のような英雄的な支援活動、さらにはより深刻なフクシマの問題が中心に報道されていた。そして、しばらくしてこの木に関する報道がされるようになった。

例えば、地元の河北新報がこの木について取り上げたのは、地震後一月近くたった4月4日であり、「耐えて残った「希望」1本」という見出しが書かれている（図13）。この記事では、既に「高田松原を守る会」副会長鈴木善久氏の談話が掲載され、地元で活躍する自衛隊、警察、消防がこの松をデザインしたワッペンを作成し職員の士気を高めているということが報告されている。一方、読売新聞では3月25日に報道されているが、そこには「奇跡の1本」という見出しが掲げられている。そして、両紙ともカラー写真が掲載され、そこには「奇跡」の物語と共に、他の震災の光景の写真とは異なる美的な質を見いだすことは可能だろう。

確かに、震災後の悲劇的状況において、とにかく「生きる希望」を見いだしたいという「物語

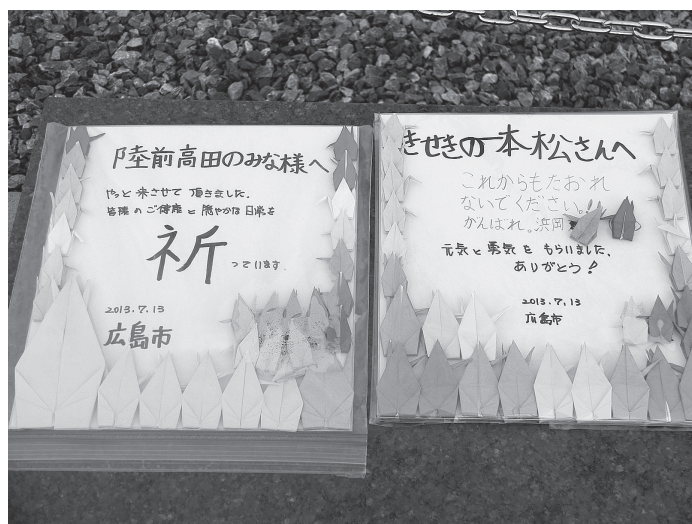


図12 奇跡の一本松の献花台上の色紙 2013年7月 筆者撮影

4月4日(月)



図13 河北新報 平成23年4月4日紙面

性」がこの木に付与されたが、ブログやフェイスブックやツイッターのようなSNS上では、深夜に長時間露光撮影されたものや、木の背後に夕陽を逆行で捉えたもののよう、シルエットにより木の形の美しさを強調するような写真が多く公開されている。このことは、この木の生命性のみならず、神秘性、さらには審美性に注目するものといえよう。

このような美的品質の問題は、先に問題とした鹿折唐桑の座礁船「第18共徳丸」や、「神戸の壁」の事例に通じるものであるが、決定的な違いがあるとすれば、この木は「自然美」に属するのに対して、前者は「人工美」の問題であるという点にある。しかし、この木は枯死し人工的に復元されたため、「人工美」と「自然美」の問題は曖昧なものとなっている。

Ⅳ. 偽物の木で何が悪いのか？

「人工美」と「自然美」をめぐる言説は、環境美学の重要なトピクスであり、西村清和は『プラスチックの木で何が悪いのか？』において、我々の日常生活の中で都市景観を美化するために、自然のレプリカを代用することの倫理性を問題にする。そこでは、カント的な「無関心性の美学」や「美的態度説」に依拠せず、そこに生ずる「美的質」に注目し、それが「自然ではないこと」あるいは「生の価値」に注目し、プラスチックの木を否定することも可能である。しかし本論では、このような「環境美学」や「環境倫理」のトピクスから離れ、「奇跡の一本松」に過剰な物語性が付与されたこと、そして、その物語性が強力な視覚性によって補強されていることのみを問題にしたい。

筆者は復元された「奇跡の一本松」を視察した際に、石巻市の大川小学校や、南三陸町の防災

庁舎に立ち寄った。それらは、実際に被災した生々しい痕跡であり、すでに様々なマスイメージの蓄積を有しているにもかかわらず、圧倒的な存在感を持ちながら、震災や津波の事実を伝えていた。そこには、視覚的なマスイメージのみでは、感じ取ることが出来ない質を有していた。無論、このような感性的な質を客観化することは困難であることは自覚しているが、それは様々な負の遺産を訪問した際に感じるようなものであった。それは、ヴァルター・ベンヤミンのアウラに近いものであった。というのも、今確かにここにある何かであったからだ。

さて、「奇跡の一本松」の復元は、見事な完成度を有していることは、復元された表皮の状況を見れば明らかであった（図14）。しかし、私たちはそれを触れることの出来ない状況で、いわば博物館の資料を見るように強いられているのも事実である。木は円状の芝生の植え込みの中に設置され、その周りは砂利が敷かれている。すると、一見芝生の植え込みの縁までは近づく事が出来そうであるが、その手前にステンレスの鎖によって侵入が禁止され、ただ遠くから見るしかない状況にある。すると、そこにあるはずの松の匂いなどは感じることは出来ず、美術館や博物館のように「お手を触れないでください」ということになる。

この状況は、この木が偽物か本物かといった判断を停滞させる役割を果たしているともいえる。確かに、この木が復元された事実は周知の事であるが、良くできた偽物にだまされることを推奨されているような状況にある。このことは、東京ディズニーシーの地中海の風景、あるいはハウステンボスのオランダの風景を、キッチュなものとせず、そこに「真正さ」を見いだすことで、そこでの観光による消費を正当化させるような状況に似ている。そこには、環境美学によって否定されるような偽物の「真正さ」を肯定的に捉えるべきという物語性が存在するだろう。さて、そのような偽物の「真正さ」を前にすると、「たかたのゆめちゃん」や公式ロゴマークによ



図14 見事なまでに再現された「奇跡の一本松」の表皮 2013年7月 筆者撮影

る観光政策のキッチュさが際立つことになるだろう。それは、あまりにも雑多な視覚情報がそこに不可されることで、そこに潜む思惑や戦略が露呈してしまうからである。

ここで「偽物の木で何が悪いか」と開き直す事はたやすいが、それは触覚や嗅覚、味覚といった低級感覚から隔離され、視覚の優位性を称えることによってのみ可能であるといえよう。そして視覚の優位性とは、カント美学がそうであるように、対象に対して無関心な態度で臨む必要がある。私たちは「奇跡の一本松」を、触れることなく、純粋な視覚対象として、その美質を称えるべきなのかもしれない。このとき、それが偽物か本物かの価値判断は、視覚性の原理から抜け落ちている。そこには、様々な目的性、つまりは政治性、経済性といったものは対象外となる。問題なのは、そういった理想的な視覚性にとどまることが現実的でないことであり、その純粋な視覚性の上に、ノイズのように様々な物語性、目的が付与されていくことにある。

V. まとめにかえて

南三陸町の防災庁舎を訪問した際に多くの観光客を見かけた。観光客は、まず犠牲者を慰霊するとともに、一様に防災庁舎を感慨深く見つめ、それを写真に収め、次の慰霊先に向かっていった。その例にもれず、筆者も陸前高田を目指そうとしたところ、廃墟となった街区に白い看板が立ち並んでいる光景に目を奪われた。それは、この地域に伝わる「きりこ」の風習に基づくアートプロジェクトであり、町の記憶を保存する意図が込められていた（図15）。ところで「きりこ」とは、神社の神職が氏子に正月の神棚飾りのために縁起物を切り抜いた半紙であるが、その「きりこ」を白い看板ボードで作成すると共に、隣にはメッセージが刻まれたボードと一緒に、かつ



図15 南三陸町 福幸きりこ祭の屋外展示 2013年7月 筆者撮影

てあった場所に設置するというものであった。このボードは現在、復興のための嵩上げ事業に伴い、かつての場所から移動することになったが、その土地の記憶と復興への願いを、密やかに伝えていた。

そこには「神戸の壁」や「第18共徳丸」あるいは、「奇跡の一本松」のような、強力な視覚的イメージは皆無である。すでに、瓦礫が撤去された状況において失いかけている痕跡を、このミニマルな白いキリコボードによって呼び覚ますしかないような状況がある。このような状況は、グーグルやヤフーといったインターネットサービス会社が、震災以前の写真をマッピングしていくようなものと対局にあるといえるだろう。無論、それらのサービスが有効な情報を提示しているとはいえ、それらは身体性を忘却させた形で提供されていることは注意しなければいけない。あるいは、そこには過剰なまでの視覚情報があるということも意識すべきであろう。

すでに「第18共徳丸」や「奇跡の一本松」の画像が大量に存在することは述べた。それらは「被災地の美しい光景」というパラドックスをも成立させるほどの過剰な視覚性を有していた。ここで、そのような視覚性に懐疑的な態度を取ることは、震災復興の「大きな物語」からこぼれ落ちるかもしれない「震災の記憶」を、かすかかもしれないが我々の身体に痕跡づけることにつながるだろう。そして、その意味において新たな震災モニュメントの可能性もみえてくるであろう。それは、震災について考えることの倫理を醸成させることになるだろう。

(しいはら のぶひろ・高崎経済大学地域政策学部非常勤講師／実践女子大学文学部教授)

註

- 1) 2011年10月17日まで東北大学で開催された第62回美学会全国大会の最終日、当番校企画として「たそがれフォーラム」(仙台国際センター)の記録は、以下のサイトで公開されている。
http://www.sal.tohoku.ac.jp/estetica/tasogare62/pdf/tasogare_all.pdf
(平成25年10月6日閲覧)
- 2) 津上英輔『あじわいの構造 感性化時代の美学』春秋社2010、13-14。
- 3) 西村清和『プラスチックの木で何が悪いのか 環境美学入門』勁草書房2011、50-68 参照
- 4) 朝日新聞東京版 2013年9月21日朝刊 39面「消えゆく震災遺構」
- 5) 気仙沼市の震災復興計画は下記のサイトを参照
<http://www.city.kesennuma.lg.jp/www/contents/1318004527115/files/hukkokeikaku.pdf> (平成25年11月6日閲覧)
その七つの柱とは、①市土基盤の整備②防災体制の整備③産業再生と雇用創出④自然環境の復元・保全と環境未来都市(スマートシティ)の実現⑤保健・医療・福祉・介護の充実⑥学びと子どもを育む環境の整備⑦地域コミュニティの充実と市民等との協働の推進を指す。
- 6) 東日本大震災復興構想会議が平成23年6月25日に出した「復興への提言～悲慘の中の希望～」は下記サイトを参照
<http://www.cas.go.jp/jp/fukkou/pdf/kousou12/teigen.pdf>
(平成25年11月6日閲覧)
- 7) 門康彦『故郷の雨 3 ー明日に架ける橋』淡路市を考える会、2010、153。
- 8) N P O 法人 KOBE 鉄人 PROJECT の目的は以下のサイトを参照。
<http://www.kobe-tetsujin.com/about.html>
(平成25年11月6日閲覧)
- 9) 陸前高田市公式サイト参照
<http://www.city.rikuzentakata.iwate.jp/kategorie/fukkou/ipponmatu/takata-ipponmatu/takataipponmatu.html> (平成25年11月6日閲覧)
- 10) https://www.jr-morioka.com/cgi-bin/pdf/press/pdf_1378186190_1.pdf
(平成25年11月6日閲覧)